



ヒューマンライフイノベーションシンポジウム 基調講演2

社会イノベーションの考え方

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 教授

金子 郁容

人と人との新しい結合による社会変革

今ほど大橋先生は、「複雑に進化したシステムにはロバスト性が求められる」というお話をされました。私は社会の変革やイノベーションにおいても同様であると思います。その事例は身近なところに見出すことができます。例えば先頃まで舎長をしていた慶應義塾幼稚舎でも、もうかなり前になりますが、教員たちと子供たちの安全をどう守るかという会議をしました。大阪の池田市で刃物を持った男が学校に乱入して子どもが被害にあったという不幸な事件があったときです。「構内を二重・三重にロックする」とか「訪問者には必ずIDのバッジを持たせる」などの案が出たものの、「非常に児童が逃げられなくなる恐れがある」「バッジを持ち帰られてしまったら、かえって危なくなることもあります」との意見が出て、なかなか決定的な解決策が出ない。結局、「出入りする人には、気付いた人が必ず声をかける」「最後は大人が命をかけても守る」という素朴なソリューションになりました。でも、これが一種のロバスト性の形成ということではないでしょうか。

「イノベーション」というと、とかく技術的革新のことだと考えられてしまいますが、しかしそれだけでは社会は変わりません。人と人との新しい結合を踏まえた「社会イノベーション」とか「ヒューマンイノベーション」ということが重視される時代になったというのが、私の意見です。

イノベーションを社会に根付かせる工夫

内閣府においては、「イノベーション25」を掲げ、2025年までを視野に入れた成長戦略の中に必要となるイノベーションの目標を挙げています。しかし、技術イノベーションを人々が受け入れ、社会に根付かせるには技術の導入とは別のプロセスや工夫が必要になります。私は、社会イノベーションを起こすためには3つのことが必要だと思っています。1つ目は、公的な法制度や行政組織や社会制度を変えることです。2つ目は、非公式な、個人や集団の行動を変え、関係変化を起こすことです。3つ目は、新たなコスト負担あるいはインセンティブのシステムを導入することです。以下、私が関わっているいくつかのプロジェクトを例に挙げて、このことを説明しましょう。

学校教育、遠隔医療、「図書街」プロジェクト

最初は、ある県の教育委員会との共同プロジェクトで、全県の統一学力テストの結果を集計・分析して学校や児童に戻し、情報を共有するというもので、システムとしては最先端とはいえない、むしろ、素朴なものです。しかし、それまで3ヶ月以上かかっていたものが一週間でできるようになりました。これまで教育現場には、「子供の目の輝き」で授業の良否を判断するなど、伝統的なメンタリティがありました。それも大事です。が、客観的にデータを見ることで、例えば算数の授業方法は成績の良い隣町の学校に学べばいいといったことが分かってきます。子供や親がより納得できる授業ができる、教員の負担も軽減できるようになりました。

次は、遠隔医療の事例です。医師不足と利用者の不安が生む悪循環を解消するにはICT技術が有効なはずなのに、ほとんど普及していません。原因の1つに、「対面」でないと良い医療ができないという“神話”があります。しかし、医師と利用者が定期的にTV電話画面で対話することで体調が顕著改善したという例が沢山あります。何時間もかけて病院に行き、1時間も待って5分間面談するということの代わりに、自宅でくつろいで遠隔相談ができるという安心をベースにしたコミュニティモデルを形成することが重要なことです。現在、NECなどと共同で行っている奥多摩町での「遠隔予防医療相談システム」の実証実験も期待できます。

最後は、シババイオシス社会に向けた、効率的ということではなく、より創造的な技術の応用としての「図書街」で、NICTの研究プロジェクトとして実施しているものです。人類の英知の蓄積である書物を、その多様な意味の関連で配置したネットワーク上の街を作って、自由に検索・連想してもらい発想を広げてもらうというものです。情報の文脈を解析・連携させることで、知の編集・遊びができるプラットフォームを作っているのです。

さらに掘り下げる話は、この後のパネルディスカッションで話させていただこうと思います。

*本稿は、C&Cユーザーフォーラム&iEXPO2008において、2008年11月11日のヒューマンライフイノベーションシンポジウムにおける慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科教授 金子郁容様の講演の内容を、NEC技報編集事務局にてまとめたものです。